状況認知と状況対応

梅田富雄（化工会）

日常生活では、日頃何気なく習慣化している行動が多いので、何か気になることでもない限り改まって日頃の意思決定や行動について考えることはないと思いますが、つまるところ、

現状をどのように感知し、望ましい行動に結びつけるか、状況認知とその結果に基づく対応がすべての場合に行われているように思います。ただし、音楽を聴いたり、絵画を鑑賞したりして

いる最中は、状況認知と状況対応については関心がなくなっている現実があります。

日常生活における問題は、とても小さなことでも現状を観たり、感じたりしたとき、満足できない状況と思えば元の満足できる状況にしたいと、何らかの行動をとり、結果を評価することで解決される

ことになります。このとき前提条件として望ましい状況が分かっている必要があり、これと現状を比較して、その間のギャップを埋めることが問題解決になるわけです。

このように考えると、ダイナミックに変化する状況の下で生活していて、多くは習慣化して行動しているために、毎日平穏無事に過ごしていれば、状況認知と状況対応については関心がないことになります。

毎日新聞やテレビを通して世の中の動きを感知させられているわけですが、それぞれのトピックや話題について自分事ではないと思えば、平穏無事に過ごせると思いますが、社会との接点を断ち切ることにも

つながるので、そうすることもできないと思います。

昔は、現役を引退すれば隠居生活に入り、気楽に余生を送っていたと思いますが、これが可能なのは世の中が変化しないことが前提になっていると思います。最近のように世の中が不安定な状況では、直ちに自分の

身の上に影響が及ばないとわかっていても落ち着かないことが多過ぎるようです。したがって、状況認知と状況対応について関心を持つことが必要であると思います。

このようなことに関心を持ったきっかけは、化学プラントのアラームマネジメントに関する研

究会で、種々の議論が行われ、関連文献などを知るに及んで、ネットが利用できる環境において、組織のラインとスタッフの

役割分担もデザインし直す必要を感じ、報告書に一部にこのことについて記事を書いたことです。

研究を行うときにも、一般に、テーマを設定し、研究を行い、成果をまとめることが普通に行われますが、ある分野のテーマについて気になる事柄を見つけて研究するにあたり、この時も状況認知と状況対応が

中心的な活動になると思います。調査結果を見て、気懸りな事柄を感知したとき、望ましい状況を思い描き、両者を比較してその間のギャップを問題として認知し、これを埋めて解決する方策を仮説として設定し。検証する

作業を行うことになります。現役時代にはこのような認識の下で仕事をしていませんでしたが、考えてみれば、日常的に誰でも行っている当たり前のことで、今更と感じる諸兄も多いのではないでしょうか。

興味を持たれた諸兄は、その気になって日常をみるといろいろの発見があるかもしれません。

学会のジャーナルに研究の進め方について原稿を依頼され、まとめた記事の一部を紹介しました。

なお参考に関連するキーワード状況認知（awareness）について、感知、察知、認知など
様々な表現で現状を捉えられるので、このことについて述べることにします。

状況認知（awareness）

問題の感知や認知については、目前で行われている状況が何となく釈然とせず、気懸りなことから、問題として

気づく行為から始まると考えられます。感知と認知の違いは awareness の解釈に拠ると考える。

awareness：The state or level of consciousness where sense data can be confirmed by an observer.観察者によってデータが確認される意識レベルの状態

英和辞典では、気づいていること、意識　と訳されている。

感知、察知、認知の定義

広辞苑第4版

感知：気配や様子から感じとって知ること

認知：事象についての知識を持つこと。広義には知覚を含めるが、狭義には感性に頼らずに推理・思考などに基づいて事象の高次の性質を知る過程

察知：おしはかって知ること。

感知とは、外界などの変化に直観的に心に感じて知ること。(Weblio 辞書)

認知とは、人間などが外界にある対象を知覚した上で、それが何であるかを判断したり解釈したりする過程のことをいう。意識と同義に用いられることもある(Wikipetia)

(感知はセンサーによって感じられる状態、認知は何であるかを解釈できる状態と考え、以下、認知を使用)

察知とは、推測して知ること。(Weblio 辞書)、察知は、「多分・・・ではないだろうか」と仮説を設けて推測して知ることを意味していると考えられる。

認識される状況によって適切な言葉が使われることになるが、簡単に、何かに気づくことを状況認知とすれば、如何にして気づくことを可能にするか、気づいた状況に対応するには、対処方法を思いつくこと、関係者の存在や協力体制の考慮、気配り、などが求められる。また試行錯誤が必要であり、その間に、ひらめきが生じることもある。つまり、気づく能力と課題解決力が求められることになる。

これらのキーワードで表現される状況は、個人の主観に基づくもので、個別の状況が出現することになる。

このことに関連して、高根の「創造の方法学」[8] に次の記述がある：

「人間が「頭のなかにある映像」を手掛かりに「現実の世界」を理解する過程は、概念を手掛かりに経験的世界を理解しようとする、人間の認識の過程と同じである。われわれが普通「事実 fact」と呼ぶものは、実は「概念 concept」によって経験的世界(empirical world)から切り取られた、現実の一部に他ならない。・・・無限の広がりと複雑さとを持つ経験的世界を、われわれの一人一人が全て、同じように認識することは不可能なことである。・・・われわれが現実に行っている認識は、われわれの持つ概念に導かれて、絶えず変化する経験的世界の一部を、辛うじてつかまえるという仕事なのである。その意味で「”概念“がなければ”事実”もない」ということが出来るのである。」つまり概念によって事実が認識されることになるし、逆に事実のよって概念が変化することになり、新しい概念の創造がなされることになる。個人がそれぞれ異なる経験的世界や概念を持って対象を認識することになるので、状

況認知の結果は多様なものになる。従って、組織における状況認知とそれに基づく課題設定にあたっては、関係者間のコミュニケーションを通して合意形成を行うことが必要になる。
(20106:9:13)